

これからのグローバル化を考える

欧州中部に位置するオーストリアとスイスといえば、アルプス山脈や美しい自然に恵まれた観光大国です。それと同時に、環境先進国でもある両国では、環境に配慮した観光政策が多く実施されています。

日本においても2008年にエコツーリズム推進法が施行されて以降、環境省を中心に様々な取組が行われた結果、日本各地で観光客が地域の自然環境や環境保全に関わることができるツアーが開催されるなどエコツーリズムが社会に浸透したことを実感します。

今回は、Atelier für Oekologie und Gartenkultur 共同代表 滝川 薫 氏にオーストリア及びスイスの有機農業を軸としたバイオホテルとバイオ地域の観光政策に関する取組についてご寄稿いただきました。

皆様も、滝川氏の自治体職員へのご提言「トップランナーの地を実際に訪れ、自分自身で感じることから得られるもの」を体感してみてください。

欧州中部の持続可能なツーリズム ～有機農業を軸とした取組みの例



Atelier für Oekologie und Gartenkultur 共同代表
滝川 薫

アルプスの大自然に恵まれたオーストリアとスイスは世界的な観光大国である。本稿では両国における持続可能な観光に向けた取組みを俯瞰しながら、そのトップランナーでもある有機農業を軸としたバイオホテルとバイオ地域について紹介する。

オーストリアとスイスにおける持続可能な観光への取組み

欧州中部に隣り合って位置するオーストリアとスイスは、風光明媚な自然や多様な文化に恵まれ、観光業が非常に盛んな小国である。環境先進国でもあり、自然を楽しむ観光に人気がある事から、観光分野でも早くから環境に負荷が少なく、地域の持続可能な発展に貢献するような多種多様な取組みが行われてきた。一例を挙げれば、自動車乗り入れを禁止したり制約する観光地、高度なエネルギー政策を実施する地域や自治体、山間地や農村

を覆う公共交通網、ハイキング道やサイクリング道の整備、ホテルの環境認証の普及などがある。

この両国は共に国の政策目標として、持続可能な観光のリーダーとなる事を掲げている。持続可能な観光とは、国際世界観光機関の定義によると、「訪問客、業界、環境および訪問客を受け入れるコミュニティのニーズに対応しつつ、現在および将来の経済、社会、環境への影響を十分に考慮する観光」（国際世界観光機関、駐日事務所ウェブサイト）とされている。国際的にはグローバル・サステナブル・ツーリズム協議会（GSTC）が、環境面だけでなく、経済と社会の側面も含む包括的な持続可能性の基準を観光業者と観光地向けにそれぞれ策定している。

日本でも取り組まれている同基準に基づく認証制度の導入については、オーストリアやスイスではまだ初期の状況にある。スイスでは国と業界のイニシアチブにより、2021年から持続可能な観光の普及を目指す「Swisstainable（スイステナブル）」プログラムが開始され、参加する企業や地域を3段階評価し、見える化している。これまでに2,500団体が参加しており、ホテルについては既存の環境認証が評価対象となるため、既に80社が最もレベルの高い評価を受けている。対して観光地の地域認証については、2023年に国際認証TourCertのスイス版が開始されたばかりで、これまでに3地域が認証を受けているのみだ。



オーストリア・チロル州のゼーフェルト村は国の持続可能な観光地認証の第1号となった。ここでもバイオホテルが地域のリーダー企業として選ばれている。©Region Seefeld, Moritz Klee

オーストリアについては持続可能な観光認証の実施において、国内での認知度が高く、幅広い分野で普及している国の「環境マーク」に重点をおいている。ホテル分野では約400社がこの認証を受けている。観光地の地域認証については、2022年に新たな「環境マーク」の地域認証基準が開発され、これまでに6地域が認証を受けている。こういった地域としての取り組みでは、経済や社会面よりも、脱炭素や気候適応、交通や生物多様性といった環境分野での取り組みが主要のように思われる。オーストリアでは2040年、スイスでは2050年までの気候中立が目指されている事を考えると当然でもある。

このような国際的な潮流を受けた政策的な取り組みとは別に、下からの運動として突出した取り組みもある。それらの中から、以下に有機農業を軸としたバイオホテルとバイオ地域の取り組みを紹介する。バイオとは、欧州では有機認証を受けた農産物や加工品の事を意味する。

バイオホテル～持続可能な衣食住を体験できる場所

バイオホテルとは、オーストリアに拠点を置くNPO法人バイオホテル協会の認証を受けたホテルのことで、バイオの食事や飲み物を提供し、CO₂を尺度とした資源管理を行っているのが特徴だ。数あるホテルの環境認証の中でも、食と農に関して最も厳しい基準である。現在、欧州ドイツ語圏を中心とした5カ国で50社のホテルが認証を受けており、休暇にも持続可能な衣食住を求める環境意識の高い消費者層に人気が高い。典型的なバイオホテルは、地域に根付いた家族経営の中規模で3～4つ星クラスのホテルである。

バイオホテルの基準にはフード基準とノンフード基準がある。フード基準では、100%有機認証を受けた食品と飲み物のみを利用する事が求められ、年に2回、第三者機関の詳細な検査が入る。ノンフード基準では、エコロジカルな建設や調達、バイオおよびナチュラルコスメの利用、再生可能な電力と熱の利用、バイオのリネンやタオル類の利用、電気自動車充電ステーションの設置、CO₂排出量の把握と削減などが義務付けられている。

CO₂排出量の算出では温室効果ガスプロトコルのスコープ3の手法が採用されており、熱と電力のエネルギーのほかにも上水・下水、紙消費、ゴミ排出、食材の生産・輸送、社用車や従業員の通勤といった、業務全体が対象となる。ほとんどのバイオホテルでは、削減後の排出量をオフセットサービスを利用して相殺し、カーボンニュートラル化している。排出量およびカーボンニュートラル化の認定についても第三者機関が行う。

バイオホテルの基準は、持続可能性の三本柱の中でも環境面と経済面を規定したものである。しかし実際には、社会面についても模範的な経営を行っているホテルが多い。また次の事例からも分かるようにバイオホテルやそのオーナーは、地域社会においても持続可能性のリーダーになっており、有機農業の普及に貢献している。

ホテル・チェーザヴァリーザ

チェーザヴァリーザは、オーストリア西部フォアアールベルク州のクラインヴァルサー谷という山奥の観光地に位置する四つ星、ハイエンドなホテルである。2007年に3代目オー



西オーストリアのバイオホテル認証を受けたチェーザヴァリーザの宿泊棟と客室。地元の建築文化を現代に解釈した高度な省エネ・エコ建築。
© Naturhotel Chesa Valisa

これからのグローバル化を考える
欧州中部の持続可能なツーリズム
有機農業を軸とした取り組みの例



100%バイオ食材のグルメな食事。ベジタリアンやビーガン食にも力を入れる。
© Naturhotel Chesa Valisa

ナーがバイオホテルの認証を受けた。徹底した環境対策と高品質な休暇、経済性を両立させることを経営目標に掲げ、年間稼働率が9割以上という驚異的な人気を誇る。

宿泊には朝食・昼の軽食・夕食が含まれており、ビ

オ・フェア・地産の健康的でグルメな食事がホテルの一番の魅力となっている。もう一つの魅力は、高度な省エネ性能を持ち、環境と健康に配慮した美しいホテル建築である。地元の著名建築家が設計した現代木造建築で、国の持続可能な建築賞も受賞した。顧客は平均して1週間程度滞在し、スキーや山登り、ハイキング、自然観察、サウナやヨガなどを楽しむ。

現在、クラインヴァルサー谷には25軒の農家があるが、同ホテルがバイオホテルに転換した当時は有機農家は1軒だけだった。それが現在では16軒に増え、その大半が同ホテルに納入している。また僻地においても優秀な従業員を維持し、育てていくことに力を入れている。若者の職業教育の場を提供し、職員の通年雇用を行い、労働は週4日。フェアな賃金や教育機会が得られるほか、高性能の従業員用住宅や三食バイオの食事が提供されている。

バイオ地域～有機農業の谷ポスキアーヴォの例

バイオ地域では、地域全体として有機農業を特徴とした地域づくりや観光に取り組んでいる。明確な定義や認証はないが、もともと有機農業への関心が高く、平均よりも高い割合で有機農業が普及している地域において、有機農業からの付加価値創出を向上させ、持続可能な地域づくりや観光資源としての活用を行っている地域がそう呼ばれている。スイスやオーストリア、フランス、イタリア、ドイツなどで見られる。

バイオの普及は、農村地域の持続可能な発展



アルプスからイタリアに抜ける南スイスのポスキアーヴォ谷はバイオ先進地域。



活気ある村の広場。

に複合的な効果を持つものであると考えられている。例えば、健全な環境の保全、生物多様性、資源循環型農業のノウハウ蓄積、付加価値の高い食品づくり、生活の質の向上、観光資源としての固有の魅力などが挙げられる。

ここでは南スイスのバイオ地域のパイオニアであるポスキアーヴォ谷の例を紹介する。東スイスのグラウビュンデン州南部に位置する人口4,500人の地域で、氷河が迫る峠からイタリアとの国境に開ける風光明媚な谷には、世界文化遺産に登録されたレーティッシュ鉄道が通っている。同州は有機農業の割合が60%と高いが、ポスキアーヴォ谷は100軒の農家のうち98軒が有機認証を取得しているトップランナーである。観光地としては、自然や農村の文化をゆったりと楽しむ場所である。

ポスキアーヴォ谷では、90年代から村のパイオニアの生産者や加工業者がバイオに転換

100%



100%ポスキアーヴォ谷の認証マーク。レストランのメニュー等に明記されている。© www.valposchiavo.ch

していった。その後、スイス国内でのバイオ食品の需要拡大と共に、有機農業の割合は飛躍的に増えた。著名な生産者にはハーブの農家や加工会社、ブドウ農家とワイナリー、多くの酪農家とチーズ工場などがある。その他にも多様な作物が栽培されており、生産者や加工業者を訪問するアグリツーリズムも充実している。

2010年からは農家と行政のイニシアチブで、さらなる地域発展のために「100%ポスキアーヴォ谷」プロジェクトが開始した。これは有機作物の域内需要や加工チェーンを強化する取り組みである。例えば製粉所や食肉加工施設にバイオ認証を取得させることで、域内でのバイオの穀物や肉の加工が可能になった。また、村の主要なホテルやレストランに100%地産材のメニューを提供させ、第三者機関による認証を行っている。地域内での地産食品の調達が行えるようなプラットフォームも立ち上げた。

域内需要の増加や多様化によって、有機農家もより多様な作物を栽培するようになり、伝統的な段々畑の農の景観の多様性も戻ってきた。谷は世界文化遺産の鉄道の緩衝地帯となっているが、そこで求められる自然や景観の保全にも繋がっている。地元観光局では「100%ポスキアーヴォ谷」を前面に押し出し、ブランド化に成功している。2021年には国連世界観光機関のベストツーリズムビレッジにも認定された。

持続可能な地域づくりが観光資源に結びつく

バイオを軸とした観光が成り立つ背景には、表にあるようにドイツ語圏のバイオ市場が大きく、ある程度の規模で生産者や消費者が存在するという状況がある。社会全体を見ても、慣行農業による環境への悪影響への批判の声は年々高まっている。そのような中、バイオホテルやバイオ地域には、持続可能な観光地としてのポテンシャルがある。

最後に、本稿を執筆するにあたり「自治体職員が海外に出向き、実際に体験する事の意義」、そして「日本に戻った時に、知見を自治体の観光資源にどう活かせるか」について述

表 日本とドイツ語圏諸国のオーガニック市場

2022	日本	ドイツ	オーストリア	スイス
農地面積に占める有機農業の割合%	0.3%	11.2%	27.5%	17.9%
食品市場に占める有機食品の割合%	1.4% (2018)	6.3%	11.5%	11.2%
世界の有機食品市場に占める割合と市場規模(ユーロ)	1.2%	11%	1.9%	2.9%
	16.2億ユーロ	153億ユーロ	25億ユーロ	38.5億ユーロ
人口	1.251億人	8380万人	904.2万人	877.6万人
人口一人あたりのバイオ消費額(ユーロ)	13	181	274	437

バイオホテル、バイオ地域の背景には、ドイツ語圏諸国のバイオ(オーガニック)市場がある。農地に占める有機農業率は、日本では認証を取得していない有機農業が行われている農地も合わせると0.6%となる。

参照: the World of Organic Agriculture STATISTICS & EMERGING TRENDS 2024 (Fibl & IFOAM) を元に著者が作成

べて欲しいとの要望を受けた。持続可能で気候中立の地域づくりというチャレンジな課題に関しては、トップランナーである地域に赴き、実務者の経験や成果を見聞きして、肌で感じてこそ伝わってくるものがある。解決策は各地で異なるにしても、多くの学びやインスピレーション、そして勇気が得られる。また日本を一時離れる事で、じっくりと考えたり、他の参加者と議論する時間が得られるのも貴重である。

帰国後に知見をどのように各地の観光に活かせるかは、それぞれの自治体の状況が異なるので私には分からない。ただ欧州の事例を見ていて思うのは、観光のためというよりも、脱炭素をはじめとする、その地域社会の持続可能な発展のための優先課題に取り組むことが、持続可能な観光の資源にもなるという事である。

著者略歴

滝川 薫 (たきがわ・かおり)

千葉県出身、北スイス在住の環境視察専門家、庭園設計者。設計事務所 Atelier für Oekologie und Gartenkultur 共同代表。20年前から欧州ドイツ語圏にて専門視察や執筆、通訳を行う。主なフィールドは地域のエネルギー大転換、省エネ・エコ建築、持続可能な地域発展、近自然の森・川づくりなど。著書に『欧州のバイオホテル～エコツーリズムから地域創造へ』他。代表を務める SJS スイス-日本サステナビリティ交流会では、欧州の持続可能性の分野のパイオニアを講師に迎えたウェビナーを定期的に開催する。

これからのグローバル化を考えると、欧州中部の持続可能なツーリズム、有機農業を軸とした取り組みの例